

出張サロン in 伊香保 セミナー：「ザスパ草津の挑戦」報告

<出張サロン in 伊香保概要>

- I. JFL観戦：ザスパ草津 vs 国士舘大学
 - II. セミナー：ザスパ草津の挑戦
 - III. 懇親会：伊香保芸能の堪能
 - IV. 伊香保周辺観光：ガイドブックには載っていない
- ※ I. III. IV. については別記報告（2004-7）参照。

<II. セミナー：ザスパ草津の挑戦>

試合終了後、小林氏の軽自動車に乗って一路伊香保温泉へ。30分ぐらいの裏道ドライブ（5人も乗っていたので）で到着した。宿は、伊香保の象徴である石段沿いの「丸本館」。セミナーの会場もこの一室である。しばらくするとザスパ草津社長の賢持宏昭氏が到着し、16：30頃からセミナーが始まった。非常に興味深い内容であった。

【日時】2004年7月24日（土）16：30～18：00

【会場】伊香保温泉丸本館内客室

【セミナー参加者（会員）】上間匠（東京大学大学院） 小林俊文（渋川青翠高校） 嶋崎雅規（帝京高校） 中塚義実（筑波大学附属高校） 松岡耕自（立命館大学体育会サッカー部）

【セミナー参加者（未会員）】賢持宏昭（(株)草津温泉フットボールクラブーザスパ草津ー社長） 篠塚太郎（日央ライフサービス(有)／カルチャートスポーツクラブ） 豊島俊春（渋川高校サッカー部コーチ）

【セミナーテーマ】ザスパ草津の挑戦

【報告者】賢持宏昭（小林俊文紹介）

【報告書作成者】松岡耕自

1. 賢持宏昭氏の自己紹介

賢持：サッカーは小中高でやっていたが、雪の多い地域でサッカーをするには悪い環境の為、夏はサッカー、冬はスキー。そして、上手くなったのはサッカーでなくスキーの方で、日本体育大学にスキーで進学。卒業後はマスコミに就職し、退社後にスポーツマネージメント会社を設立。その時に、ザスパ（旧リエゾン）草津の話を受け、群馬に来て3年。サッカーの指導などの専門的なことはよく分からないが、観戦は大好き。

2. 「ザスパ（旧リエゾン）草津」設立の経緯

賢持：Jリーグが始まった当初、いわゆる「Jリーグバブル」の時は、マスコミに籍を置いており、Jが立ち上がった頃から、こんなに華々しい舞台に立つ選手は「活躍できなかったら、どうするのか」という事を考えていた。その頃、働いていた会社に「スポー

ツ文化事業部」があり、ここでは引退した選手のラジオやテレビ出演などのマネジメントをおこなっており、当時、直接担当しなかったが、選手といろいろとお話をする機会もあった。

その頃、独立を考えていた時期に、会社から「スポーツ文化事業部の業務を引き継いで、社外に出ないか」と言われ、新たな会社を立ち上げ、そこでは植木繁晴（現ザスパ監督、当時は解説）のマネジメントも行っていた。そしてその時、たまたま数名のアマチュア選手を介して、草津の話があった。

その話は最初、草津温泉で最も大きな旅館を経営しているオーナーの方から「お金はあるが、サッカーチームの作り方が分からない」との相談だった。自分でグラウンドを4面所有し、選手の寮まであるとのこと、それは非常に良い話だと思い、2001年1月に私と植木そして大西忠生ⁱの3名で、軽い気持で草津に行った。常々、植木氏とはサッカースクールを行いながら、選手のセカンドキャリアや子供達のサッカー環境を整備したいということを話しながら、グラウンドを探していた時期だった。

草津に話を聞きに行ったところ、先程の話とは全く逆の話だった。グラウンドは町所有で、サッカーチーム（リエゾン草津）も潰れかかっており、選手寮も負の遺産として残っていたもの。以前オーナーが関わっていた専門学校が閉鎖され、状況は非常に厳しいものだった。その選手寮もいつ銀行に差し押さえられるかという状況であった。

その時の草津町の状況は、バブルがはじけて観光客が減り、客単価も大幅に下がった厳しい経営環境であった。また、草津でサッカークラブを支えていた方々からは、行き場を失ったやんちゃな若い選手が街で悪さをしたりしていた為、街の人からは「サッカー＝良くない」とのイメージがある、と言われた。ちょうどその時、W杯のキャンプ地招致活動（メキシコ、ドイツ、コスタリカ）を行ったものの、高額な手数料をエージェントから要求されるなどして調査費を使ってしまい、結果として招致できなかった。草津は元々、サッカーフェスティバルなどを行っており、サッカーをしに草津を訪れる子供達へのまちの人の評判は良いのだが、一種（18歳以上カテゴリー）のクラブが草津にあることに対してはマイナスのイメージしか残っていなかった。草津を訪れた時は、既に専門学校も運営会社も閉鎖しており、選手達はただサッカーが好きだから残っている状況。その選手達は現実逃避しているような状況で「自分からサッカーをとったら何も残らない」「働くのはいや」「サッカーをやりたい」「他に行くところもないから、残ってアルバイトをしながらサッカーを続けたい」という中途半端な状態だった。

豊島：10年前から、専門学校のチーム（リエゾン草津：以下、リエゾンと略）ⁱⁱは活動しており、一時は群馬県一部リーグに所属した頃もあったが、その後は県リーグからも降格してしまった。サッカークラブの経営もしたこともない人が入れ替りで携わり、つまり、経営のノウハウを知らない人がリエゾンを運営していて非常に混乱していた。その為、リエゾン草津は地元の大会などに参加していたが、選手の質は悪く、評判はあまり良くなかった。

賢持：そのオーナーさんは、今まで何とかリエゾンを運営し、立派な選手寮（2階建てでトレーニングルームも併設）はあるが、この寮の建設費や運営費をリエゾンの運営資金

からだけでは支払えず、本業の旅館の収入も寮の支払いに充てていたが、旅館の経営も厳しい状況になっていた。選手は専門学校の閉鎖後も、行くあてもなく寮で生活していた為、簡単には選手を退去させるわけにはいかなかった。選手からは寮費を取っていたようだが、アルバイトなど収入の少ない選手ばかりで、オーナーの十分な収入にはならなかった。そして最終的に、クラブも、本業の旅館も経営に行き詰まったため、専門家に見てもらい、クラブ存続の可否を判断してもらおうということで、私たちが草津に呼ばれた。

最初、私も大西も近い将来、このクラブは行き詰まる可能性が高いと判断し、オーナーに「やめた方がよい」との結論を出した。「やめる」というのは簡単だが、W杯キャンプ地招致失敗の直後で、本当に草津ではサッカーに対する風当たりが強かった。オーナーの本業の経営状態も厳しかったから。とはいえ、草津温泉という素晴らしい温泉がある限り、この先も大丈夫だろうと思っていた。しかし、町の人々は不況の苦しい中でもあまり努力をしない人が多く見受けられ、草津温泉で癒されたいと思って訪れた観光客に後ろ向きなことを言う従業員に、どれだけのサービスを提供できるのかと疑問に思った（滞在2日目の体験からの賢持氏の実感）。温泉地としての一時的活況も消えて、ただ草津温泉というブランドにしがみついている様に思えた。

例えば、夏に多く行われるサッカーやラグビーの大会に参加した、ある意味で泥だらけになった選手を、客単価は安い、数の多い客として泊まってもらわないと経営していけない宿も増えた。それらの見聞で、何らかの刺激がないと、この草津もやっていけないのではないかという気がした。

先程も触れたが、私はプロ選手のセカンドキャリアに関して、プロ選手になって普通の人と違う環境に身を置いて、その貴重な経験を後進の人に伝える必要があるのではないかと考えていた。私の同級生に赤沢昌美ⁱⁱⁱがいた。彼がアントラーズを解雇された後、JFLやJのチームのテストを受けていたが、結局不合格でプロに戻れなかった。国見高校を優勝に導いた優秀なキャプテンが、何故に日雇いの土方をやっているのか…非常に疑問に思った。テレビの解説などは、代表経験者で喋りの上手い人しか出来ないが、サッカースクールや総合型地域スポーツクラブがあれば、そういうプロ経験者が後進に体験を伝えられるのではないかと考えた。

昔（JSLの頃）は大卒選手と（社員）契約していたが、Jリーグ発足後は若い高卒選手と（プロ）契約するようになった。しかし、この若い選手は1～2年で将来性がないと判断されると一方的に解雇される。この若い選手が解雇後に何をしているのかを考えると、私はJクラブがもっと責任を持って育成する必要があり、また解雇する選手のセカンドキャリアを考える必要があると思っており、また解雇された選手が非常に気になっていた。そういう、若い時に芽の出なかった選手が「敗者復活戦」の出来るような、またその頑張りや人々に感動を与え、地域の活性化につながるような、そういう相乗効果を狙った施策はないかと考えて始めたのが、この「ザスパ草津」である。

3. 「ザスパ草津」誕生のきっかけ

賢持：一つクラブができることによって、スタッフを、J1であれば30名くらいは必要になるし、J2でも約20名のスタッフを雇う必要があることを考えれば、クラブを解雇さ

れた選手を雇うことによって、プロ経験者のセカンドキャリアの受け皿になれる。だったら最初から、目標を大きくJリーグ入りとして、また苦しい不況の時期だからこそ、バカに思われるような壮大な目標を掲げようと思った。「鶏と卵」ではないが、鶏（上部組織＝ザスパ）を作って、卵（地域の下部組織）を産ませようと考えた。草津町は人口が約 7,000 人の、群馬県中心部より長野の方が近い片田舎であるから、地道（卵から育てる）な策だけではうまくいかないと考えた。従って、はじめに鶏を作り、それに卵を産ませ、最終的に親子的な関係にするのがよいと考えた。

このザスパのクラブ作りの過程は、先に述べたようなマイナスからのスタートだった。例えばクラブは、選手寮の経費を負担し、いろいろな整備を行う必要がある、また監督、コーチ、スタッフの給料を払わなければならない。選手はサッカーしかしたことのない者ばかりだった為、働くということは社会勉強であり、地域の人々と共生することでもある。様々な人に支えられて、また給料を稼ぐことがどれだけ大変なことか、プロ選手（サッカーをやるということが）がどれだけ存在するかを、経験を通じて理解して欲しい。また、クラブの財政的にも、選手はサッカーだけをやっていては生活ができないため、社会人として働くことは必要だと考える。

中塚：2001 年の 12 月以降、草津から話が来て、そして実際に見に行かれた。このクラブ作り提案は、地元から出てきたというよりも、実際に見に行った賢持、植木、大西の三名で当時の草津の現状を打開する方策を話し合い、提案されたのか？

賢持：いや、最初はクラブの存続、引き受けを断った。しかし、リエゾンのオーナーの方は、私達から断れるとは思ってなかったようだった。オーナーさんは表向き、このクラブを地元に着させたいと考えていたようだが、結局、現実にはこのオーナー所有の選手寮の借金を返却する必要があった。今後のクラブ運営がうまくできれば借金は返済できるかもしれない。しかし、うまくできなければ、選手寮は差し押さえられ、オーナーさんの本業である旅館も非常に厳しい状況になったかもしれない。私達は、そういう厳しい状況をうすうす感じながら、私はクラブ存続をやめた方がよいと進言した。しかし、それでもオーナーさんは「何とか、クラブを続けて欲しい」と言われた。そこで、私達は、（1）草津町の協力が取りつけられる、（2）当分の間はいろいろと面倒を見てもらわなければならないが、クラブの運営には一切、口出ししない事、の二点の約束を取りつけた上で、クラブの運営を前向きに考える、と返事した。

4. ザスパの“ism”とは

賢持：そして、2002 年 1 月頃にザスパ草津というクラブのコンセプト、理念を考えた。その理念は「Jリーグ 100 年構想」にある通りのものが念頭にあった。また、クラブのイメージとしては、ヨーロッパの山奥にある 3～4 部リーグ所属のクラブを想像していた。例えば、平日のお昼に選手は仕事をしながら、夜に練習をし、週末は試合に出場する。試合のある週末には、地域の人々はパブで地元のクラブの試合予想をしたり、時には試合に向かう選手の激励をしたり…、そういうイメージがあった。そして、クラブの理念を考えると同時に、監督の人選も進めた。

このコンセプトや理念は今でも重要視しているが、より普遍的な理念は地域との共生であり、それはまたJリーグ100年構想で具体化されていると考える。これらのコンセプト・理念は常々、選手やスタッフに伝えている。

中塚：リエゾンからザスパ草津として新たにリスタートして、群馬県1部リーグから始めたのか？

賢持：その通り。リーグが始まったのが、2002年の5月。ただ、1月10日の時点では、クラブの再出発は決っていなかった。なぜなら、このプロジェクトを進める為には「ism(イズム)」が必要であり、その「ism」を自分の中で把握して、発揮してくれるリーダーの存在がいなければうまく進まないと考えていた。当時、今の監督の植木氏は帝京大サッカー部監督をしており、また大西氏も尚美学園大サッカー部監督をしていたため、2人とも草津に常駐することはできなかった。常駐できるのは私だけだったが、指導経験はなく、チームを指揮することは不可能だった。だから、この植木、大西、賢持の3人の理念に共感を持ち、かつ、それを自分の中で消化し、体現できる者を指導者として置かなければならない。その指導者とは、監督でありキャプテンであり、またリーダーであり、選手の兄貴的存在でないと、このプロジェクトはうまくいかないのではないかと考えた。

3人の中で、一番初めに候補に挙がったのが奥野僚右だった。そして、1月10日に奥野氏に連絡を取り、3~4日後に彼と会い、指導者として草津に来るよう説得を始めた。3人の中では、彼に断られたらこのプロジェクトを中止にしようと話していた。金銭的に余裕がないクラブだからという理由だけではないが、とにかく気持を共有しながら進めることが、ザスパを育てる上で重要だと思っていた。S級ライセンスを持っている指導者は多く、また休職している者も多くいた。しかし、私達がザスパを育てる要素として先に言及した「監督でありキャプテンであり、またリーダーであり、選手の兄貴的存在」であることを考えると、S級を持っておられる方の中で、自分のプロ経験を体で表現してくれる「生きた見本」として、プロで挫折した選手を指導できる人が必要であった。そういう意味で奥野氏は、山城高校(京都府)から早稲田大学に、スポーツ推薦ではなく、一般試験で一年浪人して進学した努力家であり、積極的にチームメイトとコミュニケーションを取り、チームの雰囲気盛り上げるリーダーシップの持ち主であるし、またJリーグの選手会副会長もつとめてきたこともあり、適任者は奥野氏しかいないと思った。そして、アントラーズというチャンピオンチームで何回も優勝をした経験の豊富さは、まだまだ若い選手が来るであろうザスパにとっては、良い生きた見本になると考えた。実際に選手と一緒に練習したりゲームを行うことによって、奥野氏は口で言うだけでなく、口で言わないプレー(=サッカーに対する姿勢)も若手に見習って欲しい。結局、ザスパにとって、奥野氏は私達と理念やコンセプトを共有し、奥野流で様々な面に影響を与え、ザスパにとっての生みの親的存在であると思う。それを我々は整理したが、奥野氏の存在があったからこそ、ここまでできたと思っている。最近のJリーグの試合中、接触プレーで足が痛いと言っている選手もいるが、ザスパでそれをやれば、次の試合に出場機会はない。「足を痛がっているくらいなら、ピッチの外に出てからころげ

ろ！」「やる気があるなら、次のプレーに移れ！」「そういうプレーを観客（お客様）はどう思うか。お金をもらってプレーする事がどれほど大変なことか、全く理解していない！」と奥野氏は言っていた。非常に良い監督でした。

中塚：最初に話をした時はまだ、アントラーズのプレーヤーだったのか？

賢持：サンフィレッチェ広島を解雇された直後だった。1ヶ月ほど説得し続け、2月10日に承諾してもらい、2月20日前後に皆で草津に入り、トレーニングを開始した。私が奥野氏を説得している間、大西氏と私が選手を集め、また草津に残っていたリエゾンの選手を集め、奥野氏の下でトレーニングを始めた。そして、草津町の住民に、ザスパ草津の活動に対する理解を求めるための説明を始めた。3月上旬くらいにほとんどの選手が集まり、練習に合流した。この時の監督の奥野氏は大変だったと思う。チームの監督の仕事をしてながら、町や関係団体の責任者と話し合いや説得をしなければならなかった。また、植木や大西は当時、大学の監督をやっていた為、チームと町との交渉はほとんど奥野氏が一人で進めていた。私は、選手登録や選手強化、スポンサー獲得の為に東京ー前橋ー草津を行ったり来たりの日々だった。

小林：賢持氏が言われた通り、地元の住民には、奥野氏の評判は非常に良かった。奥野氏は人当たりがよいし、様々な経験を持つ人だから、住民は誰一人として奥野氏を悪く言う人はいなかった。

中塚：ちょうどその頃だったと思うが、テレビで、ザスパ草津の選手が昼間は温泉で働いているというニュースを見た。

賢持：奥野氏が常々スタートの時に、このプロジェクトに関わる誰一人として、悲しいことや、人から強要されたり渋々させられたりするようなマイナス方向で行うプロジェクトであってはならないと言っていた。関わる者全てが、夢や希望ということ、我々も奥野氏もそういう考えを共有していた。奥野氏もセカンドキャリアに関して非常に注目し、また選手会としての活動もあったので、「奥野ism」でスタートできたことはザスパにとっては良かった。

小林：草津町自体が、サッカーで町興しを考えていた。草津では冬はスキーができたが夏場は何もなく、避暑地と言ってもそれほど多くの人に来るわけではない。そこで、菅平が夏場、ラグビーの合宿で人が集まるのを見て、地元の仲間3人で、草津をサッカーフェスティバルのメッカにできないかと考えて、高校の指導者を草津の町長が呼んだ。グラウンドの芝は何かするので、フェスティバルを開催できないかと相談をした。このように、草津町としては「夏のラグビーのメッカ：菅平」「夏のサッカーのメッカ：草津」としたいという意識があった。そういう流れの中で、リエゾンが設立されたのかもしれない。

賢持：ただ、外から来てくれるサッカーのお客さんは大金を生んでくれるかもしれないが、地元のサッカー（協会）自体は、お金を生むどころか、逆に赤字になって苦しむことになった。そういう意味で、外から来てくれるサッカー少年は「サッカー合宿地」を通じた街作りに向けて歓迎されるかもしれないが、自分たちでサッカーチームを作り、町興しを進めるといふ発想はなかったと思う。

小林：夏場のフェスティバルは大盛況です！そういう点で、草津にもサッカー熱は、あることはある。10年以上続いているフェスティバルは多くある。

中塚：例えば「サッカーマガジン杯」などもやっている。

で、2002年度が群馬県1部リーグで優勝。そして、2003年度は関東リーグだが、この年から関東リーグが1部・2部制になったのでは？

賢持：そうです。私達は、途中で足踏みせずに4年でJリーグ入りを目指していた。これが一年でも足踏みしたら、このプロジェクトはやめようと思っていた。なぜなら、これだけハイリスクでスタートしたため、もしも昇格を足踏みをしてしまうと、どうしてもクラブの息が絶えてしまう。先程言った「鶏が先か、卵が先か」の話ではないが、そもそも体力がない中で、しかも草津は人口7,000人の街でスタートすることだったので、昇格するスピードも持ち合わせていないと長く続かない。つまり、1年でも昇格を逃してしまうとマズイと考えていたが、群馬県1部リーグ優勝後に関東社会人リーグに昇格する際、1部制から2部制になってしまった。そのためJ入りまでに、想定よりも1年遠回りすることになりかねなかった。そこで、私や植木やスタッフと共に群馬県社会人リーグの会長と会い、そして日本サッカー協会1種委員の方に会いに行った後に、川淵会長と話し合った。

ザスパがスタートした時、日本各地のクラブチームにJリーグ入りを目指す気運が高まりつつある頃だった。JFLのなかでも、企業チームとクラブチームで運営方法や試合内容とは発想の違いがあった。Jリーグは「100年構想」を持っており、またJ3構想も示された時期であった。そこで、環境が整い、Jリーグ入りを目指すのであれば、飛び級制度^vを考えよう、と川淵キャプテンから言われた。その制度で、ザスパは関東社会人リーグ1部から全国地域リーグ決勝大会^{vi}に優勝し、今年(2004年度)JFL入りした。

中塚：入れ替りでJFLから降格したクラブは？

松岡：まず、2003年度はJFL下位2チームと、全国社会人大会（全社）上位2チームが昇格／降格を争うことになった。03年度末にJFLのジャトコT.T.（静岡県沼津市）が廃部となり、全社1位のザスパは自動昇格が決った。そして、03年度JFL下位2位のFC京都BAMB1993（京都府京都市）とFC群馬ホリコシ（群馬県）がホーム&アウェイの入れ替え戦を行った。結果、FC群馬ホリコシが2連勝で昇格を決め、FC京都は関西社会人へ降格した。

私は03年度全国地域リーグ決勝大会を会場の鶴見緑地球技場で観戦していたが、ザス

パのサポーター（街の人々？）も多く来場し、非常に盛り上がっていた。マスコミも異常に多く、例年の静かな全社とは雰囲気が違っていた。昇格を決めた試合後、選手とスタッフ、そしてサポーターが会場近くの銭湯で「ビールかけ」ならぬ「（草津温泉の入浴剤を用いて）湯かけ」で昇格を祝ったことは、全国ニュースでも放送されていた。

5. ザスパが「地域に根ざす」ということ

賢持：私達ザスパは、無理なことをやってきたな、と今でも思っている。この短期間に無理なことばかり言ってきた。「地域に根ざしたクラブチーム」作りと言いつつ、3年で何が根ざすのか、また根ざしたチーム作りができるのか。解雇された選手を集めた「寄せ集めチーム」と比べて、大塚製薬や Honda FC、愛媛 FC などのチームは、約束事も決められ、戦い方も年季が入った「歴史あるチーム」。他のチームが 10 年以上かけて築きあげてきたことを、ザスパは無理を承知で 2～3 年でやろうとしていた。こういった崖っぷちに立っているような緊張感を持って、その緊張感を地域の方と共有しながら、そして目標を達成した時の喜びは何倍にも増幅されるだろうと考えている。それをいかに地域の方と共有できるかということ踏まえながら、今まではうまくやってこられたと思っている。

小林：最初は、地元の選手はほとんどいなかった。しかし、少しずつ地元の選手も入って来るようになり、今日の試合 viii (04 年度 JFL 後期第 4 節 ザスパ草津 vs. 国士舘大) も、小久保（純）ix—佐藤（正美）xのラインが機能しているのを見ていると、自然に興奮してしまう。昔の黄金ラインで試合を決めてしまう、これは昔から彼らのプレーを知っている地元の者にはたまらない。

中塚：ハーフタイムの時にも話になったが、このチームはひょっとすると「歴代群馬県選抜+α」という体制になっていくのではないかと。そうなるとうちの人にはたまらなく楽しいだろう。

賢持：様々なチームを見ているが、育英は地元群馬出身の選手が多いのか、と問われれば、多少は県外からも来ていますと答えるしかない。チームを強くする為には、群馬の選手ばかりでは強くないと思うが、私は「ローカリティ (locality)」と言うか「ローカリズム (localism)」と言うか、地元を重視する姿勢をザスパは大切にしたいと思っている。将来的には、松田や山口あるいは佐藤（一樹）などが帰ってきたり…。今までは群馬で育った選手が、高校卒業後に高いレベルでプレーするチームはなかった。地域に Jリーグチームがある喜びは、子どもたちに「将来何になるの？」と問いかけると「ザスパの選手になる！」と答える。その様子を見るにつけ、自己満足かもしれないが、このプロジェクトをやって本当に良かったと思う。やはり、地元で Jクラブがある喜びは、将来的にはこういう子どもたちがザスパを支えてくれる、たとえ選手になれなくとも、「僕が小さかった頃、ザスパが破竹の勢いで J に上がったんだよ」「あのときの小島は、今は GK コーチか」と昔話をしながら、チームを支える担い手になって欲しい。こういう、地域に密着したクラブは、「あのチームは地元の選手ばかりで、いつまで経っても J1 に昇

格できないな」と揶揄されるようなチームでも、ある意味良いかなと思う。

小林：小島（伸・GK）は、本当に性格が良い。彼は、決して若手を引っ張っていく選手ではないかもしれないが、人間的に非常に良い。彼の年代では、小島が潤滑油になってチームのことを考えてくれる、本当に必要な選手。

中塚：インタビューの受け答えも良いですね。

6. 今後の課題①—下部組織の充実

賢持：今後の事ですが、この機運をいろいろな事業に使って頂きたい。

小林：今後の問題は、下部組織かと思う。下部組織をどのように展開していくか。一つは、この少子化の時代なので、ザスパ下部組織と小中学校の部活の関係。例えば、岩島中学校サッカー部は、ザスパ下部組織ができたため、廃部になってしまった。

賢持：下部組織は渋川、吾妻、沼田の三つ。そもそも、ザスパが関わることになったきっかけは、元々この地域には「隼イレブン」というジュニアユースチームがあり、昔は優勝したこともあるスーパーチームだった。そして、岩島中学校も、県でトップレベルのチームだった。

小林：結局、この隼イレブンのメンバーが十分に集まらなかった為、ザスパにクラブ運営の引継ぎを依頼された。そして、ザスパがクラブに関わった後、岩島中学校サッカー部員もザスパの下部組織に参加したため、中学の部活は廃部になってしまった。そういうことになる、ザスパを悪く言う人も出てくる。こういう点を考慮しながら下部組織の運営を考えないと、地元に着ると言っても、結果として反発を受ける場合もある。

中塚：しかし、岩島中学校のサッカー部の子供達は、プレーする場が学校からクラブに移っただけなのでは？

小林：いや、学校に残ってプレーしたい子も5人くらいはいた。そして、最終的には残ったのだが、部員が少なすぎて試合もできないため、廃部になった。

群馬県の山の方（渋川から北方）は中学校の学級は2クラスで、サッカー部員も10数名程度で、20名以上の学校チームはない。従って、学校クラブとザスパ下部組織が共存できるかどうかは疑問。

賢持：小林氏がおっしゃる通り、幼稚園（U-6）から育てていって、学年が上がるにつれて部員数は減るかもしれないが、ある程度は残ってくれると思う。従って、一番下から育てていかないと、今後は先細ってしまうと思っている。

小林：最終的に日本もクラブ化すると思うが、今の状態は、クラブでプレーしたい子供と

学校でしたい子の両方がいるので、この過渡期をどうするかが難しい。人数は少ないので、学校かクラブのどちらかは廃部になってしまう。

賢持：特に、渋川から北の山に近い地域は「サッカー不毛の地」とさえ言われていた。

小林：吾妻郡（中之条町、東村、吾妻町、長野原町、嬭恋村、草津町、六合村、高山村）の中に中学校は15～16校あるが、その中でサッカー部があるのは3校のみ。この状態を何とかしたいと思い、私が吾妻にいた24～25年前に3人の仲間で「吾妻サッカー協会」を設立し、トレセン活動も始めた。15年前には、郡内で中之条中学にしかサッカー部がなく、それ以外の中学生はプレーする場がなかったため、月に2回だけだがプレーする機会を作った。草津は、スキー部員が夏場にサッカーをしていた。吾妻郡の大会には、国体レベルのスキー選手達が「草津クラブ」のメンバーとしてプレーしていた。

中塚：こういう「シーズン制」のマルチスポーツが良いですね。

子供達は冬場にスキーするのは分かるのだが、最近は夏にどんなスポーツをして過ごしているのか？

小林：最近は、夏でもローラーブレードなどを使って冬のスキーの練習をしている。

中塚：野球王国というわけでもなかったのか？

小林：ウィンタースポーツか屋内のオールシーズンスポーツの競技人口が多い。例えば、吾妻ではバレーが強かった。中之条あたりも、冬場は雪が降らなくても霜が降りて、外では何もできない。結局、冬場に屋外スポーツは何もできなかった。わたしも初めて吾妻高校に赴任した時もサッカー部はなく、同好会から始めて、ゴールも買いそろえた。

賢持：今はそうではないが、かつて中之条高校の陸上部は日本の陸上の最先端をいっていた。日本の新記録はほとんど、中之条が生んだ時期もあった。昨年の中体連でも、中之条中学が駅伝で全国優勝しました。

小林：いつも山を登っているので、アップダウンの激しいアウトレック並のコースがいくつもある。

豊島：この当時は、中之条に指導者がいたので、良い選手も集まった。強豪大学への推薦枠を持っていて、大学卒業後も教員になった者も多かったが、今はもう強くはない。そういう意味で、中之条の陸上や吾妻のスケート、草津のスキーが強かった。

中塚：嬭恋のスケートや草津のスキーは、学校の部活が中心なのか？

小林：いや、学校単位ではなく、例えば嬭恋小・中・高校はスケートクラブがあり、草津

もスキークラブがある。

中塚：今の話で面白いと思ったのは、中之条では陸上が盛んで指導者がいて選手も集まったが、今は盛んではないということ。公立の学校の先生は異動があるので、熱心な先生が異動した後は、陸上が盛んだった地域でも盛んでなくなる。つまり、学校に全てを任せてしまっていると、地域には何も残っていかないのではないかと。

小林：一つの理由は、生徒数が減少し、陸上の競技人口が減ってしまったことがある。サッカー部も、中之条は吾妻郡で一番の伝統校。昔はこの地域で高校に行くとすれば、中之条高校しかなかった。今でも、吾妻郡の県議会議員には、中之条高校の卒業生が多くいる。中之条高校から筑波大へ進学した者も多くいる。こういう伝統校では、陸上や他の競技も盛んだったが、特に長距離競技が強かった。

嶋崎：やはり、学校が強くなっても、それが地域に根ざしているとは言えないのではないかと。学校のクラブや指導者が地域に根ざしていないのではないかと。

小林：草津町のスキーは、学校の教員が指導者でなく、地域の人が指導者のクラブ。

嶋崎：別にクラブの指導者の職業は何でも良いし、時には教員の方が都合の良い場合もあるが、教員は異動などを考えると地域に根ざしていない、という事例なのかもしれない。

小林：嬭恋高校の場合、スケート部の指導者は同校出身者が多い。嬭恋のスケート部で育った卒業生が地元に戻ってきて、教員をしながらコーチをしている。そして、彼らの仲間が地元でキャベツ畑などの農家をしながら、スケート部のコーチをしている。まさに、「地域に根ざした」人物でもある。

賢持：キャベツを作っているおじちゃん、おばちゃんが農作業の合間に長靴を履いて、ザスパの練習を見に来ることもある。非常に微笑ましい情景です。

7. 今後の課題②ーホームタウン

賢持：最後に、ザスパの今後の課題を述べさせて頂くと、ホームタウンの問題がある。地域に根ざしたチーム作りをしているが、残念ながら草津にはスタジアムがない。どうやってこの問題を解決するのか、スタジアムは簡単にあちこちに建設することはできない。

小林：草津に建てるのなら、全天候型のスタジアムが必要。12～3月の冬場は約2メートルの雪に埋もれてしまうので、ドーム型スタジアムが必要になるかもしれない。

賢持：そこで周りから言われたのは、何年かかっても良いから下部組織を充実させ、U-6、ジュニアユース、ユースと実績を積み上げ、育成システムを安定させた上で、初めてJに昇格する準備を進めてチームを強化すべきか、我々のようにまずトップチームを最初

につくり、そのチームが安定してから下部組織をスタートさせていくのか、どちらかのパターンしかない。ザスパの場合は後者。先程、小林氏も話された通り、競技人口が少ない地域なので、慎重に考える必要がある。クラブ全体として考えれば、育成をどうするというより、むしろザスパがこの地域にどのような活動を提供することができるのかという発想が一番重要だと考えている。この中で、育成の方針を考えることと、その対象地域を草津町にするのか、或いは前橋市にするのかという問題はある。ただ、こういう地域なので、活動地域は草津で試合会場は前橋とする、広域的なホームタウンとすることが良いのか、検討している。

選手を育て、サッカーをより普及させていくことに変わりはないが、ただサッカーのみを考えては地域にとって問題だと思う。他の競技連盟との関係もあり、また行政からの支援を受ける必要もあるので、様々な立場の人と連携し、良い関係を築く必要がある。

我々としては、群馬県でスポーツに関わる人や団体とどのように県のスポーツ環境を改善していくのか、また地域の方々にとどのようにすれば喜んでもらえるのか、ということも今後考え、提案していきたいと思っている。

8. 「J入りを目指す」こととスポンサー

松岡：「J入りを目指す」と言われているが、近年でもJFLからJチームへと移籍した選手は昨年、一昨年と一人ずつ^{xiii}だが、本気でJに行くと考えておられたのか？

賢持：私達は、クラブがJに昇格するのか、個人でJに移籍するのかの競争だと考えていたし、個人でJ移籍というのであれば大歓迎だと考えている。そういう意味でも、選手はモチベーションを高く持ってプレーをしていた。むしろ、ザスパを踏み台にして上に上がって欲しいと考えていた。

松岡：個人的に、昨年度にJFLから関西社会人に降格した「FC京都BAMB1993」のお手伝いをし、スポンサー等の営業も少し関わって苦勞をしたのだが、ザスパのスポンサーの規模の大きさに驚いた。大企業から地元の個人商店や選手の勤務先までスポンサーとしてチームを支えているのだが、特に大企業等がJFLのチームに投資をする動機を、先方の企業はどのようなメリットがあると考えていたのか？

賢持：一番はじめに支援表明をしたのが「ファーストリテイリング（ユニクロ）」だった。曰く、創業は山口県の片田舎にある商店街の一店舗から始めた店舗が少しずつ増え、それが全国規模になって、衣料業界でもトップクラスの会社になった。しかし、気が付いてみれば急激な減収に苦しんだ。どうしても、物事を進めていくと今までの理念や目的を忘れがちになる。ザスパは、人口7,000人の町から、トップリーグであるJリーグ入りを目指して、Jを解雇された選手達がなりふり構わず仕事をしながら、敗者復活戦を勝ち残ってJ入りを目指す姿勢を示している。ユニクロもそういう姿勢で頑張ってきたのではないかと。そういう姿勢を鏡に映しながら、ザスパを応援することで、ユニクロの姿勢も保っていききたいと考えておられ、そういう点でザスパの姿勢に共感をしていただ

き、サポートしていただくことになったと伺っている。サントリーや他の多くの企業もそのような姿勢だった。

我々は既成の概念を取っ払って活動をしていこうと考えていた。「サッカーウェアでないといけない」などということは、当初はお金がなかったこともあって考えられなかった。従って、ユニフォームも既存のスポーツメーカーの物でないとダメだということではなく、断然に安くてスポーツシャツでもあるユニクロのシャツにプリントをしてユニフォームにしようと考えていた。

そこからスタートし、さらに不況の温泉地で、しかも若くしてJを解雇された選手達が敗者復活戦をかけて頑張る。また、草津という小さな町からJ入りを目指すということに、ファーストリテイリングが支援を表明してから、メディアが大挙して来るなど様々な要素があって、スポンサーの興味を引いたのだろう。ザスパの姿勢に共感したと言いつつも、初年度は他のJクラブにも支援をしていた。別に戦略などがあったわけではないのだが、理念や姿勢、活動内容などが上手く絡まった結果、多くの企業の興味を引きつけられたのだと思う。

以上

<報告者：松岡耕自のコメント>

まず、本来は早急に提出すべき報告書を書き上げられず、賢持氏をはじめ参加者の皆様、そしてサロンの会員の方々にお詫び申し上げます。身内の不幸とその後のバタバタで、このような形になってしまいました。申し訳ございませんでした。

短期間ではあるがJFLのクラブにかかわった関係で、ザスパには非常に興味を持っていました。なぜ草津？あんな小さな町で？？しかも、代表経験者も含むJ解雇者が集まったクラブ？？？メディアの注目を一身に受け、またJFLの平均観客動員も大幅に増やし、来期からのJリーグ入りを決めるまでの経緯からは、社長の決断の早さを感じられた。それに、持続可能なクラブとして、これまでのJFLとは一線を画す運営であったように思われる。

ここ数年、JFLからJへ移籍した二人の選手は、セレッソ大阪で活躍をみせている。だが、JFLはやはり「アマチュアの最高峰」であって「プロへの登竜門」というリーグの位置づけではなかった。JFLも企業クラブの廃部が相次ぎ、社員扱いで入部できない例が多いように見られる。JFLのリーグ自体も、ザスパのような「プロへの登竜門」として、よりモチベーションの高いリーグであってほしい。無論、チームを運営する側も「プロ」としての活動が求められる…今回の草津訪問の感想である。

注釈

i セレッソ大阪を引退後、尚美学園大学コーチを経てザスパ草津 GM

ii リエゾン草津。サッカー専門学校、東日本サッカーアカデミーを母体としてチーム結成、2002年にザスパ草津へ改名。当時のHPは残っている。

URL： <http://www.eat-p.com/liaison/>

iii 国見高→順天堂大→住金鹿島（JSL）→鹿島アントラーズ（Jリーグ）で活躍し、引退

iv しかし、これらの山奥の2部・3部クラブは、1部リーグを目指してはいない。山奥と

いう地域性、住民の緊密な関係は類似するかもしれないが、国内最高峰リーグを目指す為の運営や経営方針とは全く、相容れないのではないか。イメージとしては分かるのだが・・・、観客層はおそらく都会の人々が多い中で、山奥モデルとしてはどうなのであろうか？個人的には、ドイツブンデスリーガで言うと マインツ（ミュンヘンの隣の小さな町のクラブ。近年はブンデスリーガ1部、2部を行き来しているチーム）を想像していたのだが。

- v 鹿島アントラーズー川崎フロンターレーサンフィレッツェ広島を引退後、ザスパ草津監督を経て、現在は現在鹿島アントラーズヘッドコーチ
- vi 「Jリーグ入りを標榜とするクラブに対する優遇措置」
- vii JFL昇格／挑戦権獲得をかけた大会、毎年12月ー1月に大阪で行われている
- viii 04年度JFL 後期第四節 ザスパ草津 vs. 国士舘大@群馬県立敷島公園サッカーラグビー場、04/07/24。
- ix 前橋育英高校ー東海大学ーモンテディオ山形。ベルツ温泉センターに勤務
- x 前橋育英高校ー横浜FCー横河武蔵野FC（期限付き移籍）。スーパーもくべえ勤務
- xi 特に、孀恋はキャベツの産地。夏の浅間山の際にも報道された
- xii 02年度に徳重（デンソー→セレッソ大阪）、04年7月に（Honda FC→セレッソ大阪）の2例。ザスパ監督であった奥野氏は、現在鹿島アントラーズヘッドコーチとしてJリーグに復帰。

JFL 日本フットボールリーグ オフィシャル web
<http://www.jfl-info.net/index.html>